

2019年（令和元年） 10月18日（金曜日） 毎週（金）14:00発行

発行所 （一財）日本エネルギー経済研究所  
石油情報センター電話（03）3534-7411（代）  
FAX（03）3534-7422〒104-8581 東京都中央区勝どき1-13-1イヌビル・カドキ11階  
ホームページ <https://oil-info.iej.or.jp>

## ■ 概況

10/3～10/9のNYMEX・WTIは、52.45～52.81ドルの範囲で推移した。

10月10日は、OPECが月報で2019年の世界石油需要見通しを3ヶ月連続で下方修正したものの、パークインド事務局長が12月上旬の次回会合での減産強化を示唆したことから、4営業日ぶりに反発した。11月限終値は前日比0.96ドル高の53.55ドル。

週末11日は、サウジ沖の紅海でイランのタンカーが爆発、イランの報道によれば「2発のミサイル攻撃を受けた」と発表されたことから、大幅に続伸した。また、協議中の米中間僚級交渉への期待感もこれを後押しした。ただ、IEAは月報で2019年と20年の世界原油需要を下方修正し、朝方は売りが先行した。パーカーヒューズ社発表の米国稼働石油掘削機は712基で前週比2基増、8週ぶりの増加。11月限終値は前日比1.15ドル高の54.70ドル。

週明け14日は、米中貿易協議における農産物をめぐる「第一段階の合意」について懐疑的な見方が広がり、3営業日ぶりに反落した。なお、紅海におけるイランタンカー爆発についても関係各国は抑制的な報道振り。11月限終値は前週末比1.11ドル安の53.59ドル。

15日は、米中貿易協議の行方に注目が集まる中、中国の9月の輸出額は前年比3%減を記録するなど、世界経済の後退感が意識され、続落した。ただ、OPECのパークインド事務局長が、協調減産の達成率は136%だとし、市場の安定のために出来ることはやると発言したことが、下値を支えた。11月限の終値は前日比0.78ドル安の52.81ドル。

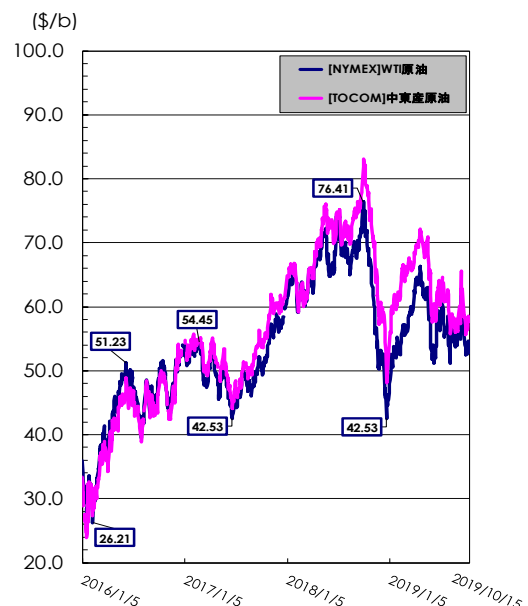
16日は、国際通貨基金(IMF)の2019年の世界成長見通しの3.0%への下方修正発表があったものの、前日のパークインドOPEC事務局長の協調減産拡大の示唆発言を好感し、3営業日ぶりに反発した11月限の終値は前日比0.55ドル高の53.36ドル。

アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場（11月渡し）は10月3日～9日の間56.90～58.60ドルの範囲で推移した。10月10日57.80ドル、11日60.30ドル、15日59.30ドル、16日58.90ドルで推移した。

為替は10月3日～9日の間106.74～107.39円の範囲で推移した。10月10日107.37円、11日108.13円、15日108.42円、16日108.74円で推移した。

そのような中で、10月15日時点の小売価格は、ガソリンが前週比0.8円の値下がり、軽は同0.7円の値下がり、灯油は同8円の値下がり（18㍈ベース）だった。ガソリン・軽油・灯油ともに4週ぶりの値下がりだった。この週（10月第2週）の原油コストは値上がりで、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに、全社0.5円の値上げだった。

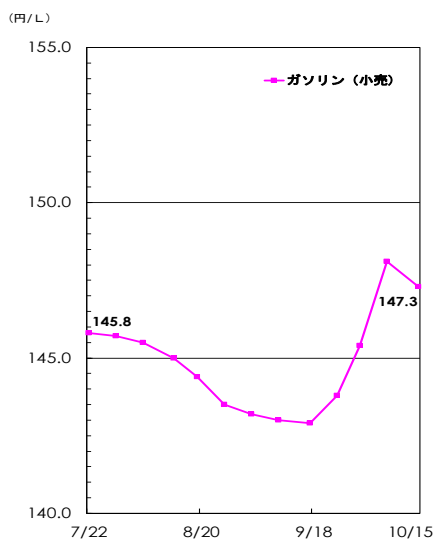
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	10/6～10/12	3,053	▼-217 ▲
	トッパー稼働率 (%)	"	78.0	▼-5.5 ▲
	原油在庫量 (千kl)	10/12	11,086	▼-1,110 ▼
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	10/15	57.67	▲1.06 ▼-21.0
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	10/14	53.59	▲0.84 ▼-18.2
	原油CIF単価 (\$/bbl)	9月中旬	63.91	▼-1.43 ▼-12.13
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	42,677	▼-1,010 ▼-10,474
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	106.17	▲0.12 ▲4.96
	外国為替TTSレート (¥/\$)	10/15	109.42	▼-1.68 ▲3.61



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	10/6 ~ 10/12	828 ▼ -122	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	849 ▲ 61	▼ -	
	輸出	"	34 ▼ -37	▲ -	
	在庫	10/12	1,537 ▼ -55	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	10/8 ~ 10/14	55.9 ▼ -1.9	▼ -19.5	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	10/8 ~ 10/14	54.4 ▲ 1.2	▼ -19.2
		(TOCOM/中部)	10/11	55.8 ▲ 1.5	▼ -17.7
	小売 [週動向] (資工庁公表)	10/15	147.3 ▼ -0.8	▼ -12.3	

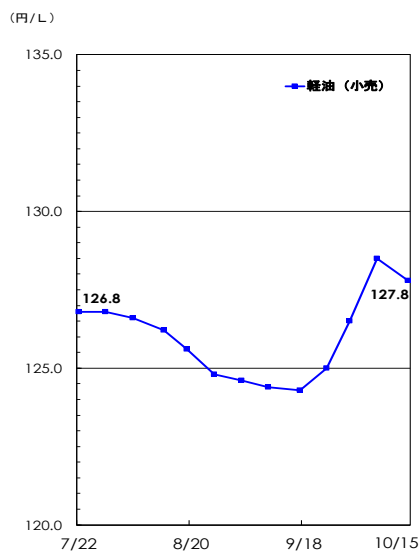
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

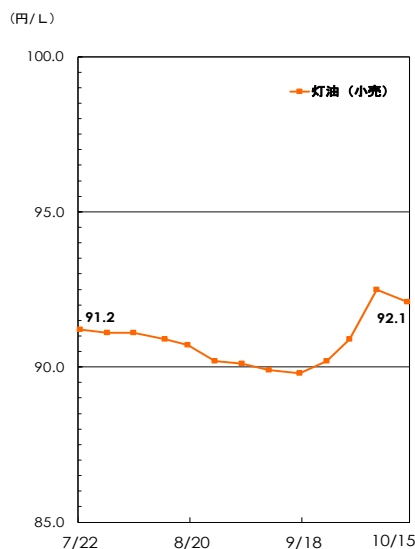
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	10/6 ~ 10/12	660 ▼ -112	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	597 ▼ -37	▼ -	
	輸出	"	112 ▼ -48	▲ -	
	在庫	10/12	1,376 ▼ -50	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	10/8 ~ 10/14	59.2 ▼ -1.9	▼ -17.5	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	10/8 ~ 10/14	61.4 ▼ -1.0	▼ -13.5
		(TOCOM/中部)	10/11	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	10/15	127.8 ▼ -0.7	▼ -10.2	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	10/6 ~ 10/12	268 ▲ 118	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	182 ▲ 50	▲ -	
	輸出	"	0 ▼ -49	▼ -	
	在庫	10/12	2,630 ▲ 87	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	10/8 ~ 10/14	58.6 ▼ -1.9	▼ -17.9	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	10/8 ~ 10/14	56.5 ▼ -0.3	▼ -18.8
		(TOCOM/中部)	10/11	58.2 ▼ -0.3	▼ -17.8
	小売 [週動向] (資工庁公表)	10/15	92.1 ▼ -0.4	▼ -7.2	



■ 関連情報

1 海外/原油

10月16日のNYMEX市場WTI原油は、前日のパーキンD OPEC事務局長の12月会合における協調減産拡大の示唆発言を好感し、3営業日ぶりに反発した。ただ、国際通貨基金(IMF)の2019年の世界経済成長見通しの3.0%への下方修正発表が、上値を抑えた。市場の次の注目は、翌日発表予定の米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報で、米国原油在庫の市場予想は前週比290万バレル増と5週連続の積み増しとなっている。11月限の終値は前日比0.55ドル高の53.36ドル、12月限の終値は前日比0.57ドル高の53.45ド

ル。

EIAによると、10月14日時点のガソリンの小売価格は、前週比1.6セント値下がりの1ガロン2.629ドル(75.7円/ℓ)、ディーゼルは同0.4セント値上がりの3.051ドル(87.9円/ℓ)となった。ガソリンは2週ぶりの値下がり、ディーゼルは3週ぶりの値上がりだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2019年10月6日～10月12日に休止したトッパー能力は38.5万バレル/日で、前週に対して5.4万バレル/日増加した(全処理能力は351.9万バレル/日)。原油処理量は305.3万klと、前週に比べ21.7万kl減少。前年に対しては37.2万klの増加。トッパー稼働率は78.0%と前週に対して5.5ポイントの減少、前年に対しては9.6ポイントの増加となった。

生産は前週に比べて灯油が増産となり、その他の油種で減産となった。ガソリン/12.8%減、ジェット/20.0%減、灯油/77.9%増、軽油/14.5%減、A重油/5.3%減、C重油/18.1%減。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比0.0万kl減)。軽油の輸出は11.2万kl(前週比4.8万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は、前週比ではガソリン、ジェット、灯油が増加となり、その他の油種で減少となった。前年比ではジェット、灯油、A重油が増加となり、その他の油種で減少となった。

ガソリンの出荷は84.9万kl(対前週7.8%増)と3週振りで増加となり、8週連続で100万klを下回った。ジェット6.0万kl(対前週2.2%増)、灯油18.2万kl(対前週37.4%増)、軽油59.7

万kl(対前週5.9%減)、A重油14.1万kl(対前週7.1%減)、C重油5.6万kl(対前週58.9%減)。

(単位:千KL)

	今週 (10/6 ~ 10/12)	前週 (9/29 ~ 10/5)	前週比	
ガソリン	849	788	▲ 61	(8%)
ジェット燃料	60	59	▲ 1	(2%)
灯油	182	132	▲ 50	(38%)
軽油	597	634	▼ -37	(-6%)
A重油	141	152	▼ -11	(-7%)
C重油	56	136	▼ -80	(-59%)
合計	1,885	1,901	▼ -16	(-1%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

10月12日時点の在庫は、ガソリン、軽油で取り崩しとなり、その他の油種で積み増しとなった。

ガソリンは153.7万kl、前週差5.5万kl減。前年に対しては2.4万kl多い。

灯油は263.0万kl、前週差8.7万kl増。前年に対しては4.1万kl多い。

軽油は137.6万kl、前週差5.0万kl減。前年に対しては17.3万kl少ない。

A重油は71.0万kl、前週差1.4万kl増。前年に対しては5.1万kl多い。

C重油は190.7万kl、前週差3.7万kl増。前年に対しては15.3万kl少ない。

(単位:千KL)

	今週 (10/12)	前週 (10/5)	前週比	
ガソリン	1,537	1,592	▼ -55	(-3%)
ジェット燃料	918	864	▲ 54	(6%)
灯油	2,630	2,543	▲ 87	(3%)
軽油	1,376	1,426	▼ -50	(-4%)
A重油	710	696	▲ 14	(2%)
C重油	1,907	1,870	▲ 37	(2%)
合計	9,078	8,991	▲ 87	(1.0%)

### 3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

10月8日～14日の原油価格は、前週比で値上がりし、為替レートわずかに円安で、原油コストは値上がりしたものと見られる。

陸上スポット価格は、10月8日～14日の間、ガソリン109～110円台で値下がり、軽油58～60円台で大きく値下がり、灯油58～59円台で値下がりして推移した。

海上スポット価格は、同期間で、ガソリン110～111円台で値下がり、軽油61円台でわずかに値下がり後ほぼ回復、灯油53～54円台で値下がり後回復して推移した。

先物価格は、同期間で、ガソリン107～109円台でわずかに値下がり後大きく値上がり、軽油61円台で値下がり、灯油55～57円台で値下がり後大きく回復して推移した。

次週の元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、0.5円の値上げとなった。

### 3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

10月8日～14日の製品スポット市況は、10月1日～7日平均と比べ、ガソリン先物を除く、全油種・全取引で値下がりした。

直近の陸上スポット価格(10/8～10/14千葉、川崎、中京、阪神の4地区の陸上ラック価格平均値)は、前週比で、ガソリンは1.9円の値下がり、灯油は1.9円の値下がり、軽油は1.9円の値下がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、前週比で、ガソリンは1.2円の値上がり、灯油は1.4円の値下がり、軽油は1.0円の値下がりだった。

先物価格は、前週比で、ガソリンが1.2円の値上がり、灯油は0.3円の値下がり、軽油は1.0円の値下がりだった。

10月第3週の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、0.5円の値上げとなった。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー4地区平均]	今週 (10/8～10/14)	前週 (10/1～10/7)	前週比
レギュラー	55.9	57.8	▼ -1.9
灯油	58.6	60.5	▼ -1.9
軽油	59.2	61.1	▼ -1.9

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値] [平均]	今週 (10/8～10/14)	前週 (10/1～10/7)	前週比
レギュラー	54.4	53.2	▲ 1.2
灯油	56.5	56.8	▼ -0.3
軽油	61.4	62.4	▼ -1.0

※上記価格は税抜き価格

参考値 (10/8～10/14実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▼ -1.9	▲ 1.2	▼ -0.3
灯油	▼ -1.9	▼ -0.3	▼ -1.1
軽油	▼ -1.9	▼ -1.0	▼ -1.5
A重油	▼ -2.0		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

### 4 国内/製品小売価格

10月15日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比0.8円安の147.3円、軽油も同0.7円安の127.8円、灯油は18%ベースで同8円高の1,657円(1%ベースでは同0.4円安の92.1円)。ガソリン・軽油・灯油ともに、4週ぶりの値下がり。都道府県別には、値上がりが3県、横ばいが3県、値下がりが41都道府県となった。全国最安値は滋賀県の140.9円(前週比0.3円安)、その次は、埼玉県の142.3円(同0.2円安)、最高値は長崎県の157.3円(同0.2円安)。最も値上がりしたのは0.2円高の佐賀県(152.7円)、最も値下がりしたのは2.7円安の島根県(148.2円)だった。

先週の原油コストは大きく値下がりし、今週適用の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、2.0円と2.5円の値下げに分かれた。今週は、原油価格は値上がりし、為替レートもわずかに円安で、原油コストは値上がりした。次週適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社0.5円の値上げとなった。ただ、これまでの卸価格値下げの転嫁が遅れていることから、次週(10月21日)のガソリンの小売価格は、小幅な値下がりが見込まれる。

(資工庁公表) (単位: 円/%)

[週動向]	今週 (10/15)	前週 (10/7)	前週比	直近高値
レギュラー	147.3	148.1	▼ -0.8	08/8/4 185.1
灯油	92.1	92.5	▼ -0.4	08/8/11 132.1
軽油	127.8	128.5	▼ -0.7	08/8/4 167.4

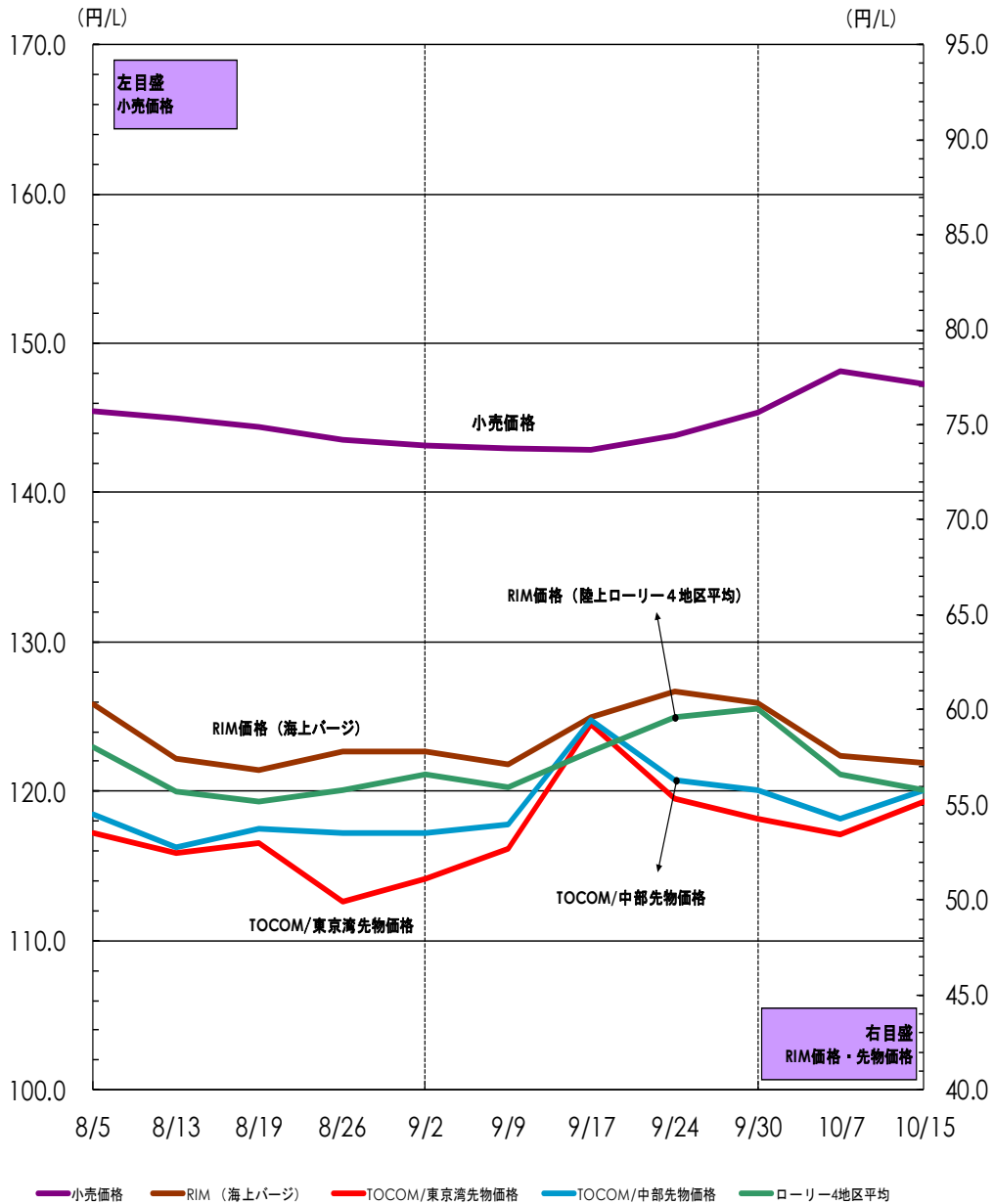
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

# ガソリン価格推移

(2019/8/5 ~ 2019/10/15)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格  
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

## ■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。  
次回(2019第28号)の公表は、10/25(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(平成31年3月末現在)は、7月31日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

### 本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

### 「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

### 本レポート掲載データの出所について

#### ①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

#### ②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

#### ③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

#### ④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

#### ⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

#### ⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPIに掲載)。